

猪苗代町木地小屋地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 積雪が多く春先等の栽培条件が不利な地域において、転作小麦の収量安定化を図り、規模拡大を実現する。
- 地域で合意形成を図り、作業の効率化に向けた団地化を推進する。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】小麦(水田+畑地)：12.3ha(R3) → 29.8ha(R6)
- 山間地の農地を積極的に借り受け、自営のそば店で利用するそばや小麦を個人で作付している。
- そばとの二毛作としてH30から小麦を栽培している。



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<需要に応じた品質の高い小麦生産のため適期作業を徹底>

- 実需者を含む関係機関と品質や栽培方法を検討し、適期作業に努めている。
- 土壌分析を実施し、結果に対応した栽培管理を行うことにより、品質・収量の向上に努めている。



<機械導入による作業の省力化・効率化>

- 補助事業を活用し、農薬散布用ドローン、サブソイラ、ドリルシーダ、乾燥機等を導入しており、面積拡大への対応や作業の省力化・効率化を図っている。



4 取組成果

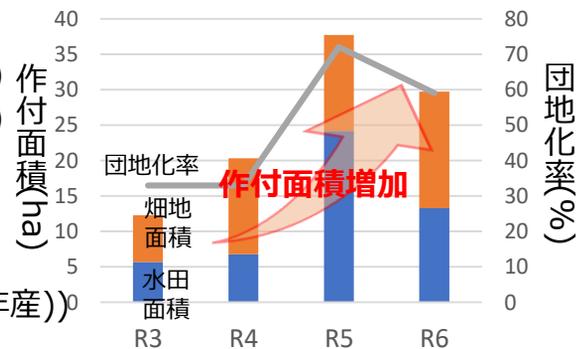
<小麦生産の面積拡大を実現>

- 周辺地区への作付を開始し、大幅に面積を拡大。
(面積：水田 5.7ha(R3年産) → 13.3ha(R6年産)
畑地 6.6ha(R3年産) → 16.4ha(R6年産))

<安定した農業所得の確保>

- 周辺地区との合意形成により、団地化率が向上。
(2ha以上の団地化率：33%(R3年産)→ 59%(R6年産))

小麦の作付面積と団地化率の推移



5 課題（7年度のポイント）

- 排水性が悪いほ場では単収が特に低い。そのため、地区と連携して排水性の良いほ場を選定し、単収の向上を図る。
- タンパク含有率が低く、実需者は販売先に苦慮している。タンパク質含率の向上を図るため、栽培暦に準じた施肥を行う実証ほを設置し、品質・収量への効果を検証する。